

## 在米日本人留学生のソーシャル・サポート・ネットワーク —ソーシャルスキル自然学習者における検討—

田 中 共 子・高 濱 愛\*

### 1. はじめに

留学生等の異文化滞在者にとって、対人関係、すなわちソーシャル・サポート・ネットワークは異文化適応の資源とも困難ともなる要因として注目される。その肯定的な面を指摘した研究としては、Yeh and Inose (2003) などがあるが、そこでは社会的なつながりを感じ自分のソーシャルネットワークに満足している留学生は、文化変容の苦痛を感じるものが少ないとしている。異文化滞在者のソーシャル・サポート・ネットワークの形成が進むと、そこから供給されたソーシャル・サポートが適応を促すという見方は、ソーシャル・サポートの適応促進仮説と呼ばれる。そして滞在先の社会や文化に即したソーシャルスキルが獲得されることは、ホストとの関係の形成・維持・発展を促して、ホストから獲得されるソーシャル・サポートを増すとみられている。筆者らが、アメリカ等への海外留学を経験した日本人学生を対象に実施した調査においても、この仮説に即した結果が得られている (Takahama, Nishimura and Tanaka, 2008)。

海外における日本人の不適応を調査した稲村 (1980) は、駐在員等海外在住のさまざまな日本人の中で、留学生が最も海外不適応の問題が多いとしており、渡航前に対人行動等を学ぶトレーニングを行うことを提案している。こうした指摘に 대응するものとして、我々は日本人米国留学予定者を対象に、アメリカン・ソーシャルスキルを渡航前に学ぶ心理教育的セッションを開発して、実践する試みを展開してきた (例えば、高濱・田中、2009a; 2009b)。セッションに参加した日本人留学生に対する追跡調査の結果からは、彼らが米国留学中に現地において、セッションで学習したスキルや、スキル使用の態度を使用していたことが読み取れた (高濱・田中、2009c)。これは彼らの留学後に、事前教育が影響を与えたものと推測される。

上記のようなセッションは未だ開発途上にあるため、一般的に実施されているわけではなく、多くの学生は、スキルの予備知識を養う確かな機会に恵まれなまま渡米している可能性が高い。彼らがソーシャルスキルを使っているとしたら、それは自然に学習したものといえる。セッションに参加せずに渡米した日本人留学生は、スキルを自然に学んでいるわけで、必要に応じてそれを使いながら、自らのソーシャル・サポートを構築していくとみることができよう。ではネットワークの発生を自然に任せた場合には、どの程度のソーシャル・サポート・ネットワークが獲得されるに至るのか。これ

\*岡山大学大学院社会文化科学研究科教授・一橋大学大学院法学研究科講師

を実証的に把握しておくことは、セッションの効果を対比的に論じる際に必要な知見となろう。

今回の焦点は、日本人の米国留学生の事例において、自然発生したソーシャル・サポートの状況を調べることにある。具体的には、日本人大学生がアメリカに留学した場合、サポートを期待できるネットワークをどの程度構築しているのかをみていく。日本人とだけつきあうようなことはないのか、日本人とアメリカ人ホストとで期待できるサポートの種類や質は異なるのかといった、問いの答えを探りながら、ネットワークの構造と質を整理する。

本研究では、ソーシャルスキルの事前学習を行わずに渡米した日本人留学生の形成したネットワークについて、留学中の2時点を対象に調査を行った結果を報告する。我々の先行研究（高濱・田中、2011）では、セッション受講者のネットワークについて報告を行っている。今回はスキルに関しては自然学習者を取り上げており、その彼らの自然発生的なネットワークを見ていくという点で、対比的検討の対象として捉えることができる。

## 2. 方法

### 2.1. 調査協力者

調査協力者は、約1年間、交換留学生として米国の大学で学んだ日本人留学生7名(表1)。彼らは、英語力については全員が留学先で求められる語学要件を満たしていたが、ソーシャルスキルや対人関係形成に関しては特に事前学習をせず渡米した。彼らが渡米後にソーシャルスキルを身につけたとしたら、それは自然な学習によるものであり、その点で彼らをスキルの自然学習者と称することができる。

7名のうち3名(N1、N2、N3)は、X大学の出身者であり、彼らをN群と称しておく。これは別報(高濱・田中、2011)で紹介した、渡米前に留学準備教育としてアメリカン・ソーシャル・スキル学習セッションに参加した人為学習者(S群)と、同じ大学に所属する者達である。そして4名は、Y大学(U1、U2)およびZ大学(U6、U7)という、別の大学の出身者であり、彼らをU群と称しておく。本研究はシリーズ研究の中の一報であるため、後の検討の便宜のため、出身大学を使った区分記号を用いて表記しておく。

表1 調査協力者の属性

I	D	N1	N2	N3	U1	U2	U6	U7
性別		女	女	男	男	女	女	女
学年		5	3	4	3	4	4	4
留学先大学		C	D	D	A	A	E	E
在籍大学		X	X	X	Y	Y	Z	Z

注1) 学年については、留学開始時の学年を指す。

注2) X大学から留学してきた留学生としては、他にN4も在籍していたが、留学中調査にも帰国後調査にも参加しなかったため、分析対象には含めなかった。X大学以外の出身者である留学生としては、他にU3、U4、U5が留学中の調査に協力したが、帰国後の調査への参加が得られなかったため、今回の分析対象からは除いた。

注3) 留学先大学の記号が同じ場合(例えばN2とN3)は、同じアメリカの大学に留学していたことを示す。

## 2.2. 手続き

留学中の2時点（初中期および後期）において、以下のようにして質問紙および面接調査を行った。

### 2.2.1. 留学中調査（留学初中期）

U群は渡米後3～4カ月が経過した留学初期に、N群は渡米後6～7カ月が経過した留学中期に、第二著者が協力者の留学先を尋ねた。N1、N2、N3およびU1、U2とは面談を行った。質問紙を手渡して、留学初期の状況に関して回答を依頼し、回答に即して半構造化面接を行った。U6とU7は、面談の都合がつかなかったため、同時期に郵送により質問紙を送付・回収した。

### 2.2.2. 帰国後調査（留学後期）

U群は帰国後約2～3カ月、N群は帰国後約8カ月が経過した時期に、協力者の在籍する日本の大学において質問紙を手渡し、留学の終盤における状況に関して回答を依頼した。面談の都合がつかなかったN1は、郵送により質問紙を送付・回収した。他6名は直接会って、質問紙に記入してもらった上で、記入内容をもとに、より詳細に尋ねる半構造化面接を実施した。

## 2.3. 質問項目

田中（2000、p64）のネットワーク質問紙にならい、まず5人以上最大10名までのネットワーク構成員を挙げてもらい、その人たちそれぞれについて、①性別、②年齢、③国籍、④回答者との関係、⑤5種類のサポート（a勉強・研究、b相談・励ます、c一緒に楽しむ等、d物やお金、e生活に必要な情報）に対する援助期待、⑥関係の満足度、⑦依頼度（相互依存度）、⑧接触頻度を尋ねた。加えてどのような話をするかという、⑨話題（個人的・一般的）、⑩既知性（渡米前から知っていたか）、⑪近接性（同じ市内に住んでいるか）について尋ねた（表2）。

表2 ネットワークに関する質問項目

1人目

性別	①男 ②女	① ②
年齢	①19才以下 ②20-29才 ③30-39才 ④40才以上	① ② ③ ④
国籍	①日本人 ②日本人以外（どこの国の人ですか？）	① ②（                    ）
関係	教職員 ①指導教官 ②他の教官・職員 学生 ③同じ授業をとっている学生 ④他の学生 縁者 ⑤家族 ⑥親戚 その他 ⑦他の友人知人（具体的にいうと？）	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦（                    ）
次のことの助けを期待できますか？	①できる ②どちらとも いえない ③できない	a. 勉強、研究 b. 相談、励ます c. 一緒に楽しむ、出かける d. 物やお金 e. 生活に必要な情報
その人との関係にどれくらい満足していますか	①たいへん満足 ②やや満足 ③やや不満足 ④たいへん不満足	① ② ③ ④
あなたとその人の どちらがより相手を 頼りにしていますか	①あなた ②ほぼ同じ ③その人	① ② ③
接する回数	①毎日 ②～週1回以上 ③～月1回以上 ④～3ヶ月に1回以上 ⑤それ以下	① ② ③ ④ ⑤
次のことを、その人と話しますか	①話す ②話さない	a. 個人的なこと（悩み、異性関係、 友達との問題、人生観、など） b. 一般的なこと（母国のこと、趣味、 楽しみ、社会問題など）
その人を留学する前から知っていましたか	①はい（どうやって知り合いましたか？） ②いいえ	①（                    ） ②
その人は、あなたの留学先の大学の近所に住んでいますか？	①はい ②いいえ	① ②

注) 2人目以降10人目まで、1人目と同様に尋ねた。

## 2.4. 分析

属性については、ネットワーク構成員の中での該当者の割合を求めた。各サポートはそれが期待できる者、満足度は大変・やや満足な者、依存度は依存度合いが等しい者、接触頻度は毎日か週1回以上の高頻度接触者、話題はその話ができる者、既知性は渡米前から既知の者、近接性は同都市居住者の割合を求めた。面接における語りについては、協力者ごとに逐語録を作成した。本稿では、高濱・田中(2011)と同様に、ネットワークの概略を描き出す意図から、質問紙調査の結果に焦点を当てて報告し、面接等の結果は別報に譲る。

## 3. 結果と考察

質問項目に答える中で挙げられたネットワーク構成員の人数を、調査時期別にまとめたものを表3に示す。留学初中期・後期とも上限の10名まで挙げた者は4名、時期により記した人数が異なった者は3名みられた。U2のみ、留学後期に記した人数の方が初中期よりも少なかったが、他は後期の人数的が多かった。

表3 ネットワーク構成員の人数 (人)

I	D	N1	N2	N3	U1	U2	U6	U7
初	中	10	10	10	5	10	8	10
後	期	10	10	10	10	8	10	10

続いて留学初中期と後期におけるネットワーク構成員の国籍をみたところ、アメリカ人が約半数を占めており、日本人と他国人は20%台であった(表4)。ホストであるアメリカ人との関係性の構築には、総じて積極的といえよう。

個人単位でアメリカ人構成員の割合に注目すると、初中期と後期において、U6では0%と10%、U2では30%と25%であった。他の協力者では、初中期は40~100%、後期は50~80%であった(表5)。総じてホストとの関係構築は良好な中であって、U6とU2はそれが比較的希薄な例といえよう。

表4 ネットワーク構成員全員をまとめた場合の国籍割合 (%)

	日本人	アメリカ人	他国人	合計
留学初中期	21.1	50.0	28.9	100.0
留学後期	27.9	48.5	23.5	100.0

表5 調査協力者別にみたネットワーク構成員の国籍割合 (%)

協力者	アメリカ人友人割合		日本人友人割合		他国人友人割合	
	①初中期	②後期	①初中期	②後期	①初中期	②後期
N1	60.0	80.0	10.0	0.0	30.0	20.0
N2	50.0	50.0	20.0	30.0	30.0	20.0
N3	50.0	60.0	10.0	30.0	40.0	10.0
U1	100.0	50.0	0.0	20.0	0.0	30.0
U2	30.0	25.0	30.0	12.5	40.0	62.5
U6	0.0	10.0	50.0	60.0	50.0	30.0
U7	40.0	60.0	40.0	40.0	20.0	0.0

注) 表中の割合は、個々の日本人留学生在が記した構成員(表3)のうち、アメリカ人の友人、日本人の友人、他国人の友人という3つのカテゴリーに、それぞれに何名が該当するかを示したものである。例えば、N1は留学初中期に10名の構成員を挙げているが、そのうち6名がアメリカ人だったことから、アメリカ人友人割合は60.0%となる。

構成員に関する情報を国籍別に整理した表6から、ネットワークの質をたどると以下の通り。まず属性についてみると、いずれの国籍の者も、同年代の者が84%以上、学内者が73%以上と多く、身近なネットワークを作っていたといえる。アメリカ人の構成員であれば、遠くに住む者とも割とつきあっていた。学内における構成員の割合は、どの国籍の構成員であっても初中期に比して後期の方が比較的高かった。つまり後期の方が、身近な学内者から成るネットワークになっていたといえる。

視察した範囲で傾向を見ていくと、得られるサポートの種類については、物やお金のサポートは、サポートの中では比較的少なく、また提供者としてはアメリカ人よりは日本人に期待していた。初中期の勉強のサポートは、アメリカ人に多くを期待していたが、後期は日本人・他国人に対する期待値が増加し、サポート供給源に広がりが見られた。相談や一緒に楽しむといったコンパニオンシップの期待できる関係は、総じてアメリカ人との間では時期的な違いが希薄だが、日本人と他国人の間では終盤に増えた。会話の内容についてみると、個人的な話のできる関係が、日本人や他国人では終盤のほうが多かった。

関係性については、後期では、既知の関係はほぼいなくなり、渡米後に新たに構築した関係によってネットワークが構成されるようになっていた。また、関係満足度と接触頻度については、アメリカ人では留学後期に減少していたが、日本人と他国人は留学後期に増加していた。相互依存度はいずれの国籍のものも、留学後期の方が高かった。

表6 ネットワークの質 (%)

項目	アメリカ人		日本人		他国人		
	①初中期	②後期	①初中期	②後期	①初中期	②後期	
属性	男性	60.0	41.4	57.9	42.1	34.6	43.8
	女性	40.0	42.4	42.1	57.9	65.4	56.3
	同年代	84.4	87.9	84.2	100.0	100.0	93.8
	学内	73.3	84.9	79.0	89.5	88.5	93.8
サポート	a. 勉強	86.0	78.8	42.1	89.5	50.0	68.8
	b. 相談	80.0	84.9	73.7	89.5	57.8	75.0
	c. 楽しむ	73.3	93.9	73.7	94.7	92.3	100.0
	d. 物やお金	28.9	12.1	47.4	26.7	30.8	25.0
	e. 情報	93.3	87.9	84.2	68.4	57.7	62.5
関係性1 (関与)	関係満足度	93.3	87.9	63.2	94.7	100.0	100.0
	相互依存度	48.9	63.6	47.4	79.0	65.4	68.8
	接触頻度	80.0	72.7	94.7	94.7	80.8	93.8
関係性2 (特性)	既知性	11.1	3.0	10.5	0.0	0.0	0.0
	近接性	68.9	66.7	84.2	100.0	92.3	87.5
会話	a. 個人的	77.8	69.7	79.0	89.5	60.0	81.3
	b. 一般的	91.1	100.0	100.0	100.0	96.0	100.0

注) 各日本人留学生在が記した構成員の人数の総和のうち、何名が当該の項目にあてはまったかという割合を示した。ネットワーク構成員の総数は、留学初中期は63名、留学後期は68名。

ネットワーク構成員について、高濱・西村・田中(2009)にならって、4つのカテゴリー(ホスト国の人、日本人、他国人、大学のシステム)に分けて整理したところ、表7のようになった。まず、ネットワーク構成員の居住地域をみると、U7が留学後期に日本の家族を挙げた以外は、アメリカに住む者から成っていた。その現地メンバーのカテゴリーについてみると、アメリカ人はクラスメイトである割合が高く、同じ授業での出会いが、友人関係に発展していったことがうかがえる。日本人はクラスメイトやルームメイト以外の友人の割合が高い。他国人のメンバーは多国籍の人から成るものの、同じ東アジア出身の韓国人と中国人が大多数を占める。大学のシステムに由来するメンバーとしては、教職員・留学アドバイザー、サークルの先生が挙げられている。

表7 調査協力者の主なソーシャル・サポート・ネットワークの構造

ネットワークの存在する地域		現地（アメリカ）				日本
ネットワーク構成員の4分類カテゴリー		ホスト国の人	日本人	他国人	大学のシステム	
調 査 協 力 者	N1	初中期	(1)クラスメイト (2)クラスメイト (3)クラスメイト (4)クラスメイト	(6)ルームメイト	(5)韓国人ルームメイト (7)チェコ人ルームメイト (10)韓国人クラスメイト	(8)米国人教職員 (9)米国人留学アドバイザー
		後期	(1)クラスメイト (2)友人 <sup>1</sup> (3)ホストマザー (4)クラスメイト (8)友人 (9)友人 (10)クラスメイト		(5)韓国人友人 <sup>2</sup> (7)韓国人クラスメイト	(6)米国人サークルの先生 <sup>3</sup>
	N2	初中期	(5)友人 (6)友人 (8)友人 <sup>4</sup> (10)友人	(3)友人 (4)クラスメイト	(1)韓国人クラスメイト (2)韓国人クラスメイト (7)エチオピア人友人	(9)米国人教職員
		後期	(5)友人 (6)友人 <sup>5</sup> (8)クラスメイト (9)友人 (10)友人	(1)クラスメイト (3)友人 (7)友人	(2)韓国人クラスメイト (4)韓国人クラスメイト	
	N3	初中期	(1)クラスメイト (2)友人 (3)クラスメイト (4)クラスメイト (5)友人	(10)友人	(6)韓国人友人 (7)韓国人クラスメイト (8)韓国人クラスメイト (9)韓国人クラスメイト	
		後期	(1)友人 (2)友人 (3)クラスメイト (4)教会 (5)友人 (7)クラスメイト	(6)クラスメイト <sup>6</sup> (8)クラスメイト (10)友人	(9)韓国人クラスメイト	
	U1	初中期	(2)クラスメイト (3)クラスメイト (4)クラスメイト (5)クラスメイト			(1)米国人指導教官
		後期	(1)クラスメイト (3)クラスメイト (6)友人 (9)友人 (10)友人	(7)友人 (8)クラスメイト	(2)香港人クラスメイト (4)中国人クラスメイト (5)韓国人クラスメイト	
	U2	初中期	(1)友人 (2)クラスメイト	(8)知人 <sup>7</sup> (9)知人 <sup>8</sup> (10)知人 <sup>9</sup>	(3)タヒチ人友人 (4)ドイツ人友人 (5)ポーランド人友人 (6)オーストラリア人友人	(7)米国人教職員
		後期	(5)友人 (8)友人	(7)友人	(1)フランス人クラスメイト (2)インド人友人 (3)ドイツ人友人 (4)ポーランド人友人 (6)ドイツ人友人	



(表7 つづき)

U6	初中期	(7)クラスメイト (8)クラスメイト	(3)友人 (4)友人 (6)友人 (9)友人 (10)クラスメイト	(1)韓国人友人 (2)韓国人クラスメイト (5)中国人友人		
	後期	(8)友人	(3)サークル仲間 <sup>11</sup> (5)友人 (6)友人 (7)友人 (9)友人 (10)友人	(1)韓国人友人 (2)コロンビア人サークル仲間 <sup>10</sup> (4)中国人友人		
U7	初中期	(3)友人 (4)友人 (6)友人 (7)友人	(1)友人 (5)友人 (9)友人 (10)友人	(2)韓国人ルームメイト (8)韓国人友人		
	後期	(1)友人 (2)友人 (6)友人 (7)友人 (8)友人 (10)友人	(3)友人 (4)友人 (5)友人			(9)家族

注1) (1) (2) … (10) は、各協力者が個々のネットワーク構成員に付した、便宜的な通し番号をそのまま用いたものである。各ネットワーク構成員については、本人からみたとき、どのような関係や存在であるかを、簡潔に記した。協力者が記した「友人」の具体的な記載は、以下の通り：<sup>1</sup> ①の姉、<sup>2</sup> 元ルームメイト、<sup>3</sup> ○○サークルの先生、<sup>4</sup> ①の友人、<sup>5</sup> ペンパル、<sup>6</sup> 寮が一緒、<sup>7,8,9</sup> インターン先の先輩、<sup>10,11</sup> △△仲間 (○○と△△は、日本文化に関わるグループ活動の名称)。

注2) 高濱・田中(印刷中)には、留学中に最も大切だと思われる人物5名について分類した表が記載されている。その5名は、表7と必ずしも同じメンバーではない。質問紙に記入後、記載を確認しながら面接を進めたが、その語りの中で追加的に言及されたメンバーも表には含まれる。例えば日本の家族の話が出てきたために、「家族」が追記されたなどの例がある。

#### 4. 総合考察

本研究の目的は、事前にソーシャルスキル学習セッションを経ずにアメリカに留学した日本人大学生の事例において、サポートを期待できるネットワークを自力でどの程度構築できていたのかをみることにあった。現地では日本人とだけつきあうようなことはないのか、ホストとの関わりをどの程度育てることができたのか、日本人とアメリカ人ホストとから得られるサポートの種類や質は異なるのか、といった問いへの手がかりを探しながら、彼らの自然発生的ネットワークの構造を探った。

調査協力者の日本人米国留学生たちは、サポートを期待できるネットワークをそれぞれに現地で構築していた。ホストとの交流には総じて積極的であり、身の回りに交流を開拓していき、同国人や他国人とも交流の輪を広げていた。そのネットワークからは、勉強やコンパニオンシップ、情報といっ

た各種のサポートを獲得していた。

しかし中には、U6とU2のように、アメリカ人の友人作りが、日本人や他国人と比べてあまり進まなかった者も見られた。これが、彼らの個人的な特性や嗜好によるものなのか、ネットワークを築くのに必要なソーシャルスキルの不足が関わっているのかどうかは、さらなる検討を要する。スキルの拡充は関係の開始を後押ししうる技能であることから、その拡充が求められる場合には、教育的な学習機会の提供が期待される。仮に留学前に彼らに対して、派遣元の日本の大学が、アメリカン・ソーシャルスキル学習プログラムを提供できていたとすればどうか。例えば人付き合いの開始という課題への、現実的な対処方略となる具体的な行動レパートリーを増やしておく。滞在国の社会文化的文脈を尊重した、対人関係形成のためのスキルを渡航前に学ぶことは、それを使う場を得たときに、彼らの対人関係形成を支援できる。留学の初期は、日本と留学先とにおいて対人関係の大幅な組み替えが行われ、その点で留学生にとっては負担の大きい時期といえる。このような状況で人間関係の構築を円滑に進めるための心理教育として、我々はソーシャルスキル学習に期待している。

最後に、今後の課題として、二点を挙げる。第一の課題は、高濱・田中（2011）で取り上げたような、ソーシャルスキル人為学習者のネットワークとの比較を進めることである。人為学習者と自然学習者を対比的に調べていくことで、それぞれのネットワークのでき方や質の違い、渡航後の適応方略や適応度合いの特徴が把握できるかもしれない。第二の課題は、ネットワークの型分類を精緻化していくことである。今回は、事例的に概略を述べたに過ぎない。日本人米国留学生を対象とした探索的研究では、彼らのネットワークが、集約型、課題特定型、希薄型の3つの型に分類できることが示唆されている（高濱・西村・田中、2009）。ネットワークのパターンを探求することは、留学生の異文化適応のスタイルを対人関係形成の視点から解明していくことにつながる。留学準備のための心理教育としてのソーシャルスキル学習が、異文化間教育として持つ可能性をさらに探っていきたい。

#### <引用文献>

- 稲村博（1980）『日本人の海外不適應』日本放送協会
- 高濱愛・西村佳恵・田中共子（2009）「短期日本人留学生のソーシャルサポート・ネットワークの構造に関する定性的研究」『静岡大学国際交流センター紀要』第3号、pp.61-77.
- 高濱愛・田中共子（2009a）「アメリカ留学準備のためのソーシャル・スキル学習セッションの試み—対人関係の開始に焦点を当てて—」『留学生教育』第14号、pp.31-37.
- 高濱愛・田中共子（2009b）「アメリカ留学準備のためのソーシャル・スキル学習の試み—アサーションに焦点を当てて—」『異文化間教育』30、pp.104-110.
- 高濱愛・田中共子（2009c）「在米日本人留学生による滞米中のソーシャルスキル使用—留学前ソーシャルスキル学習の受講者と非受講者の場合—」『留学生交流・指導研究』Volume 11、pp.107-117.
- 高濱愛・田中共子（2011）「在米日本人留学生のソーシャル・サポート・ネットワーク（1）—事前セッ

ションによるソーシャル・スキル人為学習者における検討-」日本応用心理学会第78回大会発表論文集、p.19.

Takahama, A., Nishimura, Y., & Tanaka, T. (2008). The influence of social skills on getting social support for adolescents during study abroad : A case study of Japanese short - term exchange students 『留学生交流・指導研究』 Volume10、pp.69-84.

Takahama, A., & Tanaka, T. The use of social skills by Japanese students while studying in the United States 『留学生教育』 (印刷中)

田中共子 (2000) 『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・サポート』 ナカニシヤ出版

Yeh, C. J., & Inose, M. (2003). International students' reported English fluency, social support satisfaction, and social connectedness as predictors of acculturative stress. *Counselling Psychology Quarterly*, 16 (1), pp.15-28.

#### 謝辞

本研究は、科学研究費補助金萌芽研究No.19653099 (代表・高濱 愛) の助成を受けた。

#### 付記

本研究の内容は、2011年9月10日に日本応用心理学会第78回大会において発表され、第一著者が主たる発表者をつとめた。調査的面接は第二著者が担い、研究の立案、データの分析、本稿の執筆などは協力して行われた。

